



主催者あいさつ
(公財)日本生態系協会 会長
池谷奉文

本日は、学校関係者、保育関係者、ビオトープの活動に関わる団体・企業の皆さまなど、全国から多くの方にお集まりいただき、誠にありがとうございました。

国際的に求められています「持続可能な社会」を構築していく上で、その基盤となる自然を守り育てていくことがたいへん重要となります。たとえばドイツでは、1980年代にはビオトープを保全・再生しネットワークさせるまちづくりを実現させていました。

私たちの協会では、そうしたまちづくりがわが国においてより一層進むよう、その人づくりの場である学校ビオトープ・園庭ビオトープの普及に向けて、今後とも力を注いで参ります。

**全国学校・園庭
ビオトープコンクール2017
『発表と交流大会』**

2018年2月11日(日) 13:00-16:00
東京大学 伊藤国際学術研究センター 伊藤謝恩ホール



秋篠宮殿下のおことば

本日、「全国学校・園庭ビオトープコンクール2017」の発表と交流大会が開催されるにあたり、皆さまと共に出席できましたことを、たいへん嬉しく思います。そして、この度、各賞を受賞される皆さま

に心よりお祝いを申し上げます。

自然は、多様な生き物が暮らしていく場であるとともに、地球温暖化の防止や災害による被害の軽減をはじめ、多くの機能を有しております。そして、その自然の活用は、教育や保育においても大切なものと考えられており、なかでも幼児教育や保育においては、自然との触れ合いが子どもの豊かな感性や思いやりの心を育てると言われています。また、学校教育では、自然とそこに生息する生物を観察することにより、児童・生徒たちの興味や関心を喚起し、探究する力を育てるとともに、その中から今までにない知見が得られることがあります。

子どもたちの周りから身近な自然が少なくなりつつある今日(こんにち)、学校や園庭に作るビオトープは、さまざまな面で、園児・児童・生徒たちの成長に資する大切な空間であると言えます。この度のコンクールにおける受賞事例では、身近な自然を積極的に活用した、興味深い取り組みが紹介されています。このような活動は、これからの教育や保育にとっての参考事例になりましょうし、現在国際社会が求めている持続可能な社会に向けた人づくり、そして地域づくりにも大きく貢献する意義深いものと考えます。

終わりに、本コンクールも今回で10回目を迎え、身近な自然の大切さが広く認識されるようになってまいりましたが、このことは、これまで活動に携わってこられた多くの方々のご尽力によるものであり、ここに深く敬意を表します。そして学校ビオトープ、園庭ビオトープの取り組みが、今後も日本各地で普及し、自然を慈しむ心の輪が広がっていくことを祈念し、私の挨拶といたします。

**第1部
開会**

開会のあいさつ 池谷奉文 (公財)日本生態系協会 会長
秋篠宮殿下のおことば
来賓のごあいさつ 新妻秀規氏 文部科学大臣政務官
 笹川博義氏 環境大臣政務官
 築和生氏 国土交通大臣政務官
 ハンス・カール・フォン・ヴェアテルン氏 ドイツ連邦共和国大使

表彰式(上位5賞)

上位5賞受賞校・受賞園の取り組みの発表★
講評 教育の視点から 佐島群巳氏 東京学芸大学 名誉教授 / 帝京短期大学 名誉教授
 環境の視点から 三島次郎氏 桜美林大学 名誉教授

第2部

ポスター発表 日本生態系協会賞、ビオトープの活動を支援する団体・企業
 賞状の授与 日本生態系協会賞、学校・園庭ビオトープ奨励賞

祝賀懇親会

★ 取り組みの発表は、ウェブで動画をご覧ください。
<http://www.biotopcon.org/>



講評 …教育の観点から

**ビオトープは人間形成に
欠かせない教育資源**

東京学芸大学 名誉教授
帝京短期大学 名誉教授
佐島群巳氏

各受賞校・園の取り組みを拝見し、三つの感動を申し上げたいと思います。

一つ目は、子どもの発想からビオトープが生まれ、子どもの発想でビオトープが広がっている点です。「園で生きものを探したい」「学校で生きものすめる場所をつくりたい」という子どもたちの、非常に率直で素朴な発想が個々の活動の大きなきっかけになっていました。

二つ目は、先生方の願いがあふれているという点です。現代の子どもたちは、バーチャルな世界にどっぷりと浸かり疑似体験の肥大化が進んでいます。そうした中で、先生方は「もっと子どもたちに本物の体験をさせたい」「子どもが本来持っている感性と知性と社会的な行動力を身につけさせたい」という意欲をもち、ビオトープを通じた教育や保育に取り組まれていました。

三つ目は、先生方が現代の子どもたちに求められる能力や人間力をきちんと認識し信念をもってビオトープを実践されているという点です。幼稚園や保育所等の場合は、子どもの、自然に親しみをもち、自然を愛し、自然を大事にする、そして子どもの本来持つ感性を磨いていくことをねらいとして取り組まれていました。小中学校では、「自分たちの地域・ふるさとの自然を復活しよう、回復しよう」という態度の醸成、さらには、高校以上では「学んだことを、持続可能な社会をつくるために地域に活かしていく」という実践力の育成まで教育のねらいに込めて、教育が実践されてきました。子どもたちに対して、知識だけではなく、体験を通じて態度や実践力が身につくようカリキュラムが改善され、展開されていたことがとても印象的でした。

「子どもたちを支える先生」、「地域の方々」、皆が一体となって作り出した「生物多様性」、これらは子どもたちの人間形成になくはならないものです。私はこれを「教育資源」と言っております。この教育資源を効果的に活かすために学校・園庭ビオトープがあるのです。今回印象的であった三つの感動と共に、この教育資源がより一層全国に広がることを願っています。



講評 …環境の観点から

**生きものの声を聞く力
自然の働きを見る力**

桜美林大学 名誉教授
三島次郎氏

私は、各受賞校・園の事例を拝見し、ビオトープの生きものに代わり、皆さまに御礼を申し上げたいと思います。ただ、私が言うまでもなく、受賞校・園の皆さまは生きものの言葉無き声を既に耳にされているかも知れません。これはビオトープと付き合っていく上で、とても大切なことです。生きものの言葉を耳にするためには、たくさん生きものが生き、たくさん時間が流れ、移り変わりながら現代に至る「自然」をよく知る必要があります。

幼稚園や保育所から大学に至るまでさまざまな発達段階があり、異なりはあるとは思いますが、見えない自然の働きを見る目を持つことも大切です。見えないものは見えるはずがないと、思う方がおられるかもしれません。例えば、1本の草がどれくらい水を蒸発させているか、酸素を作り出しているか、実験する方法はいろいろとあります。感じることで以外にも、そうした実験を通じても見えない自然の働きを知る方法があると思います。

自然についての理解を深めていけばいくほど、そこに本当の学習の面白さが見えてきます。例えば田んぼとトンボ。このたびのコンクールでもトンボのために田んぼをつくった事例を幾つか拝見しました。トンボが生きていくためには虫がいなければなりません。その虫がたくさんいると稲はうまく育ちません。トンボから見れば、田んぼには虫がたくさんいた方がよい。私たち人間からすれば、田んぼに虫は1匹もいない方がよい。さて、私たちはどのような田んぼをつくったらいいのでしょうか？

私たちはいろいろな場面で自然との付き合い方を考えることが求められています。幼児から大学生に至るまで、聞こえない生きものの声、見えない自然の働きを感じる力を、学校・園庭ビオトープを通じて、引き続き培っていただきたいと思っております。

2018年2月11日(日)、コンクールの締めくくりとなる『発表と交流大会』を開催しました。

上位5賞の受賞校・受賞園によるステージ発表のほか、協会賞や学校・園庭ビオトープの活動を支援する団体・企業などによるポスター発表が行われ、約500人がつどった会場は満席、関心の高さがうかがわれました。

また、閉会後の祝賀懇親会では、さまざまな分野、立場の方にご参加いただき、お祝いや労いとともに、幅広く親交が深められました。